五箇山の合掌造り

五箇山は、伝統的な合掌造り家屋がある相倉と菅沼という、世界遺産となっている 2 つの集落で最もよく知られています。「合掌造り」という言葉は、文字通り「祈りを捧げる手のように建てられた」と訳され、この様式を象徴する茅葺きの切妻屋根が、祈りのような姿勢で曲げられた両手に似ている様を説明しています。この建築様式が採用された主な理由は、この地域固有の環境、気候、産業に対応するためです。五箇山は、冬に大雪が降る傾向があるため、このような角度の付いた急勾配の屋根によって、家屋は大雪に耐えることができ、さらに屋根の構造の内側に絹の生産に適した屋根裏スペースが余分に作られます。五箇山の合掌造り家屋は、隣接する岐阜県の白川郷よりも急勾配な屋根を持つものが多くなっています。その理由はこの地域は湿度がずっと高く、より重たい雪が降るためです。合掌造り家屋は釘を使わずに建てられており、その代わりに縄や自然の材料を使って建物の強度を保っています。

一見、五箇山と白川郷の合掌造り家屋は同じように見えるかもしれませんが、それぞれの地域固有の特徴を反映して、そこにはわずかな違いが存在します。例えば、五箇山の合掌造りでは、茅の切断面が横向きではなく下向きに配置された結果、端が丸みを帯びた切妻となっています。一方で白川郷では、横向きの材料を使って屋根が葺かれています。もうひとつの構造上の違いとして、五箇山の家屋は、出入口が切妻の端側の下にあることを意味する「妻入り」様式に分類され、これに対して白川郷の家屋は、建物の長辺に沿った屋根の棟に平行して出入口がある「平入り」様式に区分されます。